HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	オーストラリアのリテラシー、ニューメラシー教育における二つの「基準」をめぐって ： 多文化社会における教育評価
Author(s)	青木, 麻衣子
Citation	Sauvage ： 北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院院生論集, 5, 43-54
Issue Date	2009-03-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/38213
Type	departmental bulletin paper
File Information	4_p43-54.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

【研究論文】

オーストラリアのリテラシー、ニューメラシー教育における二つの「基準」をめぐって
――多文化社会における教育評価――

青木　麻衣子
日本学術振興会　特別研究員

１．はじめに――問題の所在

オーストラリアでは、2008 年５月、特定学年の児童・生徒を対象にリテラシー、ニューメラシーの全国共通テストが実施された。1901 年の連邦制樹立以来、初等中等教育に関する権限が各州にある同国において、全国「共通」テストが実施されたのは、初めてのことである。

1990 年代後半以降、特定学年の児童・生徒を対象としたリテラシー、ニューメラシーのテストは、これまでも毎年、実施されてきた。しかし、それらは、連邦政府が定めた「基準」(「ベンチマーク」) を参照しつつも、あくまでも各州政府・教育省が作成し、各州の責任により運営・実施されるという原則の下に実施されてきた。そのため、テストの実施日や実施形態、内容が各州で異なり、正確な比較が難しいとの問題点も指摘されてきた[1]。

例えば、同じ基準を用いて作成されたテストでも、出題方法や解答形式によって、正答率に違いが出る。また、オーストラリアに移住してからの日にちが浅い、英語を母語としない等で受験を免除される子ども達の規定も州により異なる。そのため、統計上の母数やその構成に違いが生じ、単純な州・地域間比較にさえ、しばしば困難が生じることとなる。全国共通テストは、このような「違い」をできるだけ軽減し、「公正な」テストを実施するために必要不可欠だと見なされてきたのである。

各州作成テストから全国共通テストへの移行に伴い、評価に用いられる「基準」も変更された。各州作成テストでは、すべての児童・生徒が身につけるべき最低限の基準として、連邦政府の主導により開発された「ベンチマーク」（benchmarks）が用いられてきた。しかし、全国共通テストでは、ベンチマークに該当するレベル設定は残しつつ、より柔軟に児童・生徒の教育成果の把握を可能にする「アチーブメント・スケール」（achievement scales）が用いられるようになった。

筆者は、これまでの研究で、リテラシー、ニューメラシーに端を発した学力調査の推進とその実施のための「基準」の開発・設定が、①これまで各州の状況に応じて実施されてきたオーストラリアの教育に、一定の枠組みをもたらしつつあること[2]、また、②その枠組みの強化・徹底が、連邦政府から州政府への補助金給付という条件を伴って、近年、特に強化される傾向のあること[3]を指摘してきた。また、統一的な「基準」の活用が、先行研究も指摘しているように[4]、移民や先住民など多様な背景を持つ人々の差異を意図的に無視し、その差異ゆえに考慮せねばならない支援の提供を困難にしてきたことにも疑問を呈してきた[5]。「基準」の確立・活用は、常に新たな「境界」を設定するという点で、包摂と排除の原理を内包する。しかし、多文化社会オーストラリアにとって、そのような線引きには、一層の熟慮が必要であると考える。

本稿では、このような動向及び筆者の問題関心を背景として、リテラシー・ニュ

ーメラシーテストで用いられる、ベンチマーク及びアチーブメント・スケールという二つの「基準」に注目し、それらが必要とされた経緯、目的、内容を整理し、提示する。そして、それにより、それぞれの基準が可能にする教育評価の形態と、そこからうかがえるオーストラリア連邦政府が目指す学校教育のあるべき姿とを考えてみたい。

２．リテラシー・ニューメラシー教育の推進と「ベンチマーク」の確立

２．１　リテラシー教育政策の歴史的展開

オーストラリアにおいて、「リテラシー」という言葉が政策文書等で意図的に使われるようになったのは、1990 年代初頭以降のことである。1980 年代後半に行われた大規模な教育改革は、当時の経済不振を背景として、学校教育の成果と国の経済発展とを密接に関連付けることを目的に行われたが、その一つの柱として重視されたのが、英語のリテラシー教育であった。

1994 年には、より具体的に、当時首相を務めていたキーティングが発表した白書のなかで、国家の経済低迷とオーストラリアの子ども達の低いリテラシーとの相関関係に対する疑念が示された[6]。そして、オーストラリアがリテラシーに関する信頼できるデータを保持していないこと、また、今後、学校教育が抱える問題を解決する上でも、そのようなデータの収集が必要不可欠であることが主張された[7]。

この提言に基づき、1996 年、オーストラリア教育研究所（Australian Council on Educational Research : ACER）が、特定学年（３・５年生）の生徒を対象に、リテラシーに関する初の全国調査を実施した[8]。調査の実施に際しては、国家レベルでの信頼できるデータを収集するために、同一の基準で同一の方法により評価する必要のあることが確認された。そのため、問題の作成は、各州のカリキュラムの指標とされている英語のカリキュラム・プロファイル（English Curriculum Profile）に基づき行われた[9]。また、子ども達の評価に実際に携わることになる教員に対しても、事前に、専門家による研修が提供された。さらには、特に先住民生徒に対し、文化的な適切性が考慮される必要があると考えられ、調査に用いられる設問の適切性・公正さが、多文化教育組織の代表者、第二言語としての英語（ESL）担当教員、先住民団体の代表者等により構成される特別班により事前に審査された[10]。

その結果、実際に、オーストラリアの子ども達の「幅広い」リテラシーの程度が明らかになった。ACER が当初発表した報告書では、３年生、５年生ともに、上位 10%の生徒は、下位 10%の生徒よりも、５歳ほどリテラシーの程度が優れていることが確認された[11]。そして、同一学年内でのこのようなリテラシーの「多様性」に応えるため、教員には決め細やかな指導が求められた。しかしながら、当時、開発途上にあったベンチマークに照らして行った別の分析では、３・５年生ともに、基準を満たしていない生徒が全体の約三分の一を占めていること、また英語以外の言語を母語とする生徒ではその割合が約４割に、先住民生徒の場合は、それが約７～８割にまで増加することが報告され[12]、オーストラリアの子ども達のリテラシーが、概して「危機的な」（at risk）状況にあると主張されたのであった[13]。

このような状況を受け、翌 1997 年には、連邦及び各州教育大臣により構成される教育雇用訓練青少年問題担当大臣審議会（Ministerial Council on Education, Employment, Training and Youth Affairs : MCEETYA）が「初等教育段階を離れるすべての子どもが、適切なレベルで計算し、読み書きし、また綴ることができる

こと」を国家目標として採択した[14]。そして、この目標を実現するために、「国家リテラシー・ニューメラシー計画」に署名し、子ども達のリテラシー及びニューメラシーの改善に協働で取り組むことを明らかにした。さらに 1999 年には、21 世における学校教育に関する国家指針（「アデレード宣言」）のなかで、すべてのオーストラリア人がリテラシー、ニューメラシーを身につける必要性が、再度確認された。

国家リテラシー・ニューメラシー計画では、学校に入学する子ども達ができる限り早く、教員により、リテラシーの程度を測定されること、またそれにより危機的な状況にある子ども達を明確化し、集中的な支援の提供を図ることが重視された。そのため、その「危機的」な状況を判断するために必要な「ナショナル・ベンチマーク」の開発が急務とされた。またそれにより、毎年、ベンチマークに照らした生徒の評価に関する報告が、国家レベルで為されるべきことも確認された。

以上のように、オーストラリアにおける英語のリテラシー教育は、特に 1990 年代以降、主として経済的な関心を背景として推進されてきた。1996 年には、当時の経済低迷の主要因の一つと考えられた子ども達のリテラシーを測定するための全国調査が実施され、その結果、それが「危機的な」な状況にあることが明らかにされた。そして、そのような状況を打開するために、リテラシー教育に関する国家目標が、ニューメラシーに関するそれとともに制定され、連邦・各州教育大臣によって、国家レベルでその推進に取り組むことが確認された。ベンチマークは、そのような国家目標を、国を挙げて達成するために不可欠な国家基準として、準備される必要があったのである。

２．２　「ベンチマーク」の確立とその中身

1996 年に全国リテラシー調査が実施されて以降、その教育に対する危機意識の高揚から、MCEETYA に、その開発の責任を担うベンチマーク特別委員会（Benchmarking Taskforce）が設立された。この委員会は、連邦及び各州教育大臣、全国カトリック教育委員会（the National Catholic Education Commission）、独立学校協会全国審議会（the National Council of Independent Schools' Associations）、そしてベンチマークの実質的な開発を担うカリキュラム・コーポレーションにより構成された。この構成員からもうかがえるように、ベンチマークの開発は、ベンチマークのその後の普及の徹底を鑑み、公立私立の別を問わず、オーストラリアの教育機関に広く認められ、その使用を約束されたものでなければならなかったのである。

1997 年には、３・５年生のリーディング、ライティングのベンチマークの原案が提示された。この原案は、その後、保護者や校長組合、教員組織、企業関係者、先住民教育審議会等の関係者や専門家集団による協議を経て、最終的に完成された[15]。このベンチマークの開発も、1996 年に実施されたリテラシーに関する初の全国調査と同様に、公正（equity）に対する強い意識の上に成り立っている。国家リテラシー・ニューメラシー計画では、先に言及したように、すべての生徒のリテラシー・ニューメラシーの修得が謳われており、それらの技能が学校におけるその後の学習を支える必要不可欠な要素だと見なされている。そのため、ベンチマークは、生徒の言語・文化的背景にかかわらず、すべてのオーストラリア人に到達されるべき基準に設定される必要があると考えられたのである。

ベンチマークは、「特定の教育段階にある子ども達のリテラシーとニューメラシ

ーのための、国家的に承認された最低限必要とされる基準（nationally agreed minimum acceptable standards）を示した一連の指標（indicators or descriptors）」である[16]。ここでいう「最低限必要とされる基準」（minimum acceptable standards）とは、「リテラシーとニューメラシーの決定的な臨界レベル（critical level）であり、生徒が学校での十分な成果を残す上で困難を感じることがないようなレベル」を意味している[17]。

ベンチマークは、また、リテラシー、ニューメラシーの必要不可欠の部分を示すものであり、特定の教育段階におけるカリキュラムのすべての領域にまたがるものではない。さらに、ベンチマークは、1996 年の調査で指標とされたカリキュラム・プロファイルに示されるように生徒の学習成果の進展を示すもの（progress map）ではなく、その後の学校教育で満足のいく成果を達成する上で必要とされる到達度レベルを問題としている。これらのことは、ベンチマークがあくまでも技能・領域にかかわるものであり、特定の教科についての評価を行うものではないこと、また、生徒の個々の成長を継続的に示すものではないことを示している。

そのため、毎年、MCEETYA により公表される、ベンチマークに照らした州作成テストの結果でも、表１に示したように、ベンチマークを到達しているか否かが評価の対象とされており、集団全体における個々の生徒の位置づけや、彼・彼女らの個人的成長の過程が問題にされることはない。また、男子・女子、先住民生徒・英語を母語としない生徒等、生徒の属性に従いベンチマークの到達度が公表されているが、これは、属性を同じくする子ども達の教育成果を集団として把握することにより、その後の支援の提供を行いやすくするという狙いがあると考えられる。

表１　ベンチマークに即した評価の公表

「読み」のベンチマークに到達している三年生の割合					
	全生徒 (All Students)	男子生徒 (Male Students)	女子生徒 (Female Students)	先住民生徒 (Indigenous Students)	非英語母語話者の生徒 (Language Background Other Than English: LBOTE)
Vic	93.6	91.8	95.2	83.3	93.1
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
全体	93.4	92.0	95.0	80.7	91.6

出所：MCEETYA, *National Report on Schooling in Australia Preliminary Paper (National Benchmark Results Reading, Writing and Numeracy Years 3, 5 & 7)*, 2007, p.5.をもとに作成

これらのことから、ベンチマークは主として、①すべての生徒に達成されるべき最低限の基準を示す、②特定の教科ではなく技能・領域にかかわる、③生徒の成長の度合いを継続的に示すものではなく、基準を超えているか否かを判断する、という三つの特徴・機能を持つと指摘できる。そしてこの特徴こそ、すなわち、ベンチマークの基準としてのハードルの低さこそ、各州・各学校がこれまで各地の実状に即して実践してきた教育活動の継続を前提とし、また可能にしてきたと考えることができるのである。

しかしながら、ベンチマークのこのような性格は、一方で、各州の取り組みに「ず

れ」をもたらすのりしろを必然的に内包していたと指摘できる。それゆえ、評価の妥当性・適切性という点で問題があると考えられるようになったのである。そこで次に、そのような「ずれ」を内包したベンチマーク・テストに関する各州の取り組みを、クイーンズランド州に焦点を当てて具体的に見ていきたい。

２．３　「ベンチマーク」を用いた各州テスト

1999 年度以降、昨年度まで、国家リテラシー・ニューメラシー計画及びアデレード宣言で承認されたリテラシー教育の目標を達成するために、各州で毎年、ベンチマークに照らしたテストが作成され、各州の裁量により実施・評価されてきた。クイーンズランド州やビクトリア州等、人口規模の大きい州では、それ以前から、抽出もしくは悉皆調査による学力テストが実施されてきた[18]。そのため、各州作成テストは、①保護者や学校等への報告を目的に、特定学年の生徒のデータを収集し、その成果・活動の改善に役立てる、②（国家への報告のために）ナショナル・ベンチマークの基準に照らして生徒の評価を行うという二つの目的を有していた[19]。

各州テストには、特定学年の生徒を対象とする、ナショナル・ベンチマークに即した試験問題を開発する、ACER や専門家を調査の実施・評価過程に含む等の共通点はあるものの、特別な事情等によりテストを受けなくてもよい免除規定はもちろんのこと、その内容や方法、実施時期に至るまで、種々の違いが見受けられる。例えば、多くの州で、英語を母語とせず、英語を公用語としない国・地域より移住した者で、オーストラリアへ来てからの期間が１年未満の者は、テストを受けなくてもいいと規定されている[20]。それに対し、クイーンズランド州では、ESL 話者のために開発されたバンドスケールに照らして、一定レベル未満のリテラシーしか有していない者のみが、テストを受けなくてもよいと考えられている[21]。そのため、クイーンズランド州は、他州に比して、テストへの参加率は高いという特徴がある。

しかしその一方、同州では、このように多様な言語文化的背景を持った子どもがテストに参加するという状況を考慮して、その内容・方法に工夫を凝らしている。表２は、クイーンズランド州で 2006 年に行われたリテラシー・テストの内容を示したものである。セッション１のスペリングでは、まず教員が読み上げる文章の「書き取り」が行われる。また、休憩を二度挟んだ後、最後に行われるリーディングでも、本テストに入る前に、「練習」の場・時間が設けられている。

これらは、生徒がテストに慣れることを目的に実施されている。オーストラリアではこれまで、学校教育のなかで、筆記試験が用いられることがあまり一般的ではなかった。そのため、生徒は、「テスト」という形式自体に馴染みがない。テスト実施マニュアルでも、「子ども達にとって、この体験がトラウマになることがないよう、十分注意すべきである」と主張されており[22]、テストの実施自体に、まず慎重にならざるを得ない様子をうかがうことができる。また、特に３年生は、年齢的にも、一定時間内、椅子に座らせておくこと自体が難しいと考えられている[23]。そのため、彼・彼女らがテストに集中できるよう、種々の工夫が必要とされるのである。

また、特に遠隔地に住む先住民等は、地理的・言語文化的背景から、課題そのものの意味がうまく理解されないことも想定される。最初の休憩の後、セッション１のなかで実施されるライティングでは、生徒が作文を始める前に教員による課題提示及びディスカッションの時間が設けられている。これは、その課題を理解し、自らの考えを深めるという狙いの下に行われているが、それ以外に、文化的妥当性・

適切性を徹底的に補うとの目的もあると考えられる。多くの生徒にテストの門戸を開く一方で、州作成テストが、地理的条件や言語文化的背景により不利益を被ることなく、公正に実施され、評価されるよう、配慮が為されているのである[24]。

表２　クイーンズランド州のリテラシー・テスト日程（2006 年度）

セッション１	・　スペリング（書き取り）（５～10 分） ・　スペリング（文章校正）（５～10 分）
休み時間	
セッション１ (上記からの継続)	・　ライティング課題提示（10～15 分） ・　生徒のライティング（25 分） ・　確認・編集（５分）
休み時間	
セッション２	・　精読のための導入及び準備項目の実施（５～10 分） ・　リーディング・ビューイング（45 分）

出所：Queensland Studies Authority (QSA), *2006 Queensland Years 3, 5 and 7 Literacy and Numeracy Tests, 2006 Test Preparation Handbook*, Queensland Government, QSA, 2006, p.13,をもとに作成。

このようなテストは、第一に、州の学校教育カリキュラムに沿って作成される。同州のカリキュラムには、特定の年齢段階までに教授・学習すべきことが順を追って掲載されているので、カリキュラムに沿ったテストを作成することは、教授・学習と評価の一体化を図ることにもなる。先にも指摘したように、テストの実施に際しては、教員の役割が重視されている。実際に、テストで用いられる解答用紙にも、教員の指示を待って作業を進めるよう明示されている。これらは、筆記による試験に基づく評価とはいえ、それがあくまでも通常の教育活動の一環であり、基本的には、個々の教員が、自身が担当するクラスの生徒の状況を把握する必要があるとの認識に基づくものだと考えられる。

しかしながら、2008 年からの全国共通テストへの移行により、このような状況は一変した。そこで次に、この移行の背景と、新たに確立された基準及びテストの内容とを見ていきたい。

３．学力調査の推進と「到達度段階」の確立

３．１　リテラシー・テストに端を発した全国学力調査の推進

リテラシー、ニューメラシーを皮切りに、現在、オーストラリアでは、科学、シティズンシップ教育、ICT の各学習領域についても、全国的な学力調査が推進・実施されている。2000 年、MCEETYA は、「アデレード宣言」で示された指針に照らして、特定領域の教育成果を監視（monitor）するために、国家レベルで報告・比較可能な基準・指標（Key Performance Measures：KPMs）の確立に合意した[25]。そして、特に子ども達の「学力」を継続的に調査するプログラムとして、国家評価プログラム（National Assessment Program：NAP）を設立した。

現在、NAP では、表３に示すように、特定学年の子ども達の知識・技能が、毎年、もしくは三年に一度の周期で測定されている[26]。基本的には、それらの学年に該当する生徒すべてが調査の対象とされているが、生徒の母語や障がいの程度等を考慮

して、各州で、先に示したような免除規定が設けられている。また、シティズンシップ教育の評価は、地理的状況を考慮し、特定州のみでの実施に留まっている。

表3 NAP で対象とされる四つの学習領域

	リテラシー・ニューメラシー	科学的リテラシー	ｼﾃｨｽﾞﾝｼｯﾌﾟ教育	ICT リテラシー
実施年	・毎年 ・3年毎(PISA) ・4年毎(TIMSS)	・3年毎 (2003 年に試行) ・3年毎(PISA) ・4年毎(TIMSS)	・3年毎 (2004 年に試行)	・3年毎 (2005 年に試行)
対象者	3，5，7年生 (原則は悉皆)	6年生	6，10 年生 (特定州のみ)	6，10 年生
評価基準	ベンチマーク (最低限の基準) ⇒ｱﾁｰﾌﾞﾒﾝﾄ・ｽｹｰﾙ	スタンダード	スタンダード	スタンダード

KPMs は、ある到達基準を達成した生徒の割合、より正確には、特定期間内にそのプログラムに参加し、到達基準を達成した生徒の数を示している。また、それらの結果得られた評価を公開することは、保護者を中心とするオーストラリア市民に対し、国や州、学校が説明責任を果たすことだと考えられている。これまで、学校教育の成果、特に先住民教育の成果は、その歴史的背景も考慮し、ある意味で成果の改善･向上に対する積極的な介入のできない「聖域」と見なされる傾向があった[27]。しかし、学校教育も国民の税金でその多くが賄われており、その成果に対する説明を果たすのが、その責任主体である国や州、学校の役割だと考えられるようになったのである。

KPMs の確立に伴い、これまでリテラシー及びニューメラシーの分野で用いられてきたベンチマークを、他の領域と同様「スタンダード」へと移行させるべく、その準備が開始された。先述したように、ベンチマークは、その後の学校教育での教授・学習に必要とされる「最低限の基準」である。そのため、ベンチマークを基準とした全国調査は、特に支援が必要な教育上危機的な状況にある子ども達の明確化を主眼としてきた。それに対し、スタンダードは、子ども達の知識・技能の程度（proficient）に関する、より正確で具体的な情報提供を重視する。そのため、生徒は集団全体における自身の位置づけを自ら相対的に確認できるとともに、教員、学校､保護者もその向上に対する支援に具体的にかかわることができると考えられる。

KPMs の開発の下地には、それが、各評価領域における生徒の多様な教育成果の報告を可能にするという原則があった。またそのために、特定の領域において、異なる年齢集団にまたがった子どもの教育成果を測る際には、単一の基準・指標で測定することが望ましいとの見解も共有された。しかしながら、リテラシー、ニューメラシーのナショナル・ベンチマークは、これらの原則・見解を満たしているとは言いがたい。KPMs でその他の学習領域の基準・指標とされるスタンダードに倣って、リテラシー、ニューメラシーの学習領域においてもより具体的な評価を行うことは、州間・学校間・生徒間等の様々な区分に基づく成果の比較を、より動的なも

のへと変更する可能性を持っている。すなわち、スタンダードの設定は、生徒の学力の多様性をより柔軟に表現できる材料を提供すると考えられる。

しかしながら、リテラシー、ニューメラシーの領域へのスタンダードの導入は、その評価対象であるカリキュラムに、ある程度一貫性を持たせる必要を生じさせる。すなわち、基準・指標の確立は、当然のことながら、評価される内容・対象者に一定の「同一性」を要求するのである。そのため、現在、国家として一貫性のあるカリキュラム（national consistency in curriculum）を運用するため、連邦レベルで作成された指針をもとに、各州のカリキュラムを改定する作業が進められている[28]。また、テストの対象年齢を合わせる必要性から、現在、各州により異なる就学開始年を、2010 年を目処に統一する方向での調整も議論されている。

各州が初等中等教育に責任を持つオーストラリアにとって、基本的には、このような方向性を受け入れるか否かは、各州の判断に任せられている。しかし、それらが各州大臣の承認の下に採択されたという理由から、それらは既に、各州の合意を得たものと見なされている。また、近年では、連邦政府から州政府への補助金を規定する法律でも、補助金を受け取る上で、NAP への参加や報告、それに国家指針に基づくカリキュラムの改定等が、各州の義務とされている[29]。そのため、これらの指針に基づき調査を行い、そのための内容・制度の統一を図ることは、各州にとって避けて通れない道となっているのである。

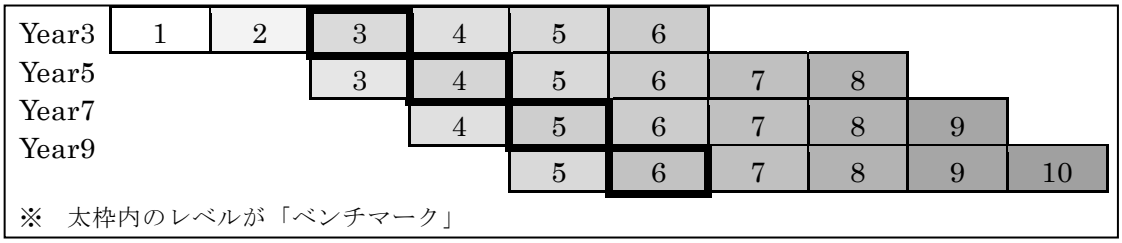
このような背景から、2008 年、リテラシー、ニューメラシーの各州作成テストは全国共通テストへと移行され、そこで用いられる基準・指標もベンチマークからアチーブメント・スケールへと変更された。最後に、その基準及びテストの中身から、新たな基準を支柱に進められる教育評価について見ていきたい。

３．２　全国共通テストの導入と「アチーブメント・スケール」の確立

2008 年 5 月 13～15 日、オーストラリアで初めて、共通テストによる、リテラシー、ニューメラシーの到達度調査（National Assessment Program- Literacy and Numeracy : NAPLAN）が行われた。共通テストを行うことにより、教員は個々の生徒の学習到達度を、国家基準に照らして、また他の子ども達と比較することにより、今までより正確に把握することができる。同様に保護者も、子どもの教育成果に関する具体的な情報を得ることができ、またその進展を、時間を追って追跡することができる。すなわち、全国共通テストの活用は、これまで各州で行われてきたテストに比べ、子ども達のリテラシー、ニューメラシーの程度を、より大きな枠組みで、他者との「比較」により、一層明確に提示できるのである。

このような成果の具体的把握及び比較を可能にしたのが、ベンチマークの代わりに共通テストの指標・基準として新たに用いられたアチーブメント・スケールである。アチーブメント・スケールは、図１に示したように、１～10 のレベル（Band）に分かれており、学年が上がるにつれ、すなわち、３・５・７・９年生とテストを受けていくにつれ、その階段を上がって行けるよう組み立てられている。また、これまでのテストで用いられてきた、その後の学校教育に必要とされる最低限の基準を示すベンチマークも、学年ごとにそれぞれの該当レベルが示されている。そのため、アチーブメント・スケールへの移行により、これまでベンチマークが果たしてきた、特に支援を必要とする子ども達の明確化とともに、その上下に分布する子ども達の多様な学習成果の把握の双方が可能になると考えられる。

図１　アチーブメント・スケールの構造



※　太枠内のレベルが「ベンチマーク」

全国共通テストへの移行に伴って、アチーブメント・スケールの導入とともに、リテラシー教育でこれまで評価の対象とされてきた内容に、表４に示したように、文法・綴り等（Language Conventions）が付け加えられた。これは、文中のスペルミスの訂正を求めたり、単数・複数形の別や動詞の時制の適切性を問うたりする問題により構成される。

表４　国家評価プログラム日程――リテラシ・ニューメラシー（2006 年度）

学年	５月 13 日	５月 14 日	５月 15 日
３年生	文法・つづり（40 分） （50 問） ライティング（40 分）	リーディング（45 分） （設問６，38 問）	ニューメラシー（45 分） （35 問）
５年生	文法・つづり（40 分） （50 問） ライティング（40 分）	リーディング（50 分） （設問６，36 問）	ニューメラシー（50 分） （40 問）
７年生	文法・つづり（45 分） （50 問） ライティング（40 分）	リーディング（65 分） （設問８，46 問）	ニューメラシー（80 分） （40 分×２，80 問） （計算機なし＋あり）
９年生	文法・つづり（45 分） （50 問） ライティング（40 分）	リーディング（65 分） （設問８，48 問）	ニューメラシー（80 分） （40 分×２，80 問） （計算機なし＋あり）

出所：MCEETYA, *3579 Test Preparation Handbook, 2008 National Assessment Program Literacy and Numeracy*, Queensland Government, Queensland Studies Authority, 2008, p.6.をもとに作成

この全国共通テストには、クイーンズランド州のテストで見られたような、テスト実施中の教員による指示やディクテーション、生徒同士のディスカッション等、生徒が課題を理解するのを助けるようなゆとりはない。テストはすべて筆記のみにより行わる。また、採点上の問題もあるとは考えられるが、選択式の問題が非常に多く、解答に幅がないというのも印象も受ける。さらに、各州テストの際には、各州が、各地の状況に照らして決定していたテストの免除規定も、英語を母語としない場合には、オーストラリアへ来てからの期間のみにより判断されることとなった。

このような州作成テストから全国共通テストへの移行に伴うテスト内容・方法の変更は、少なくともクイーンズランド州の子ども達にとっては、これまでと全く違う内容・方法のテストを受けなければならないという点で、少なからず抵抗があっ

たものと推察できる。特に、テストの実施に際しての教員の役割が、テストの「引率者」から「監督者」へと変化したことは、生徒に不安を与える原因となったことであろう。また、全国「共通」テストであることから、国家学習指針に準拠しつつとは言うものの、オーストラリア各州すべてのカリキュラムを網羅することは不可能に近い。実際、クイーンズランド州の担当者は、全国共通テストの設問中、州のカリキュラムと合致する問題は、約半数だろうと推察する[30]。そのため、テストを受ける前の準備クラス等はあったとしても、現行の州のカリキュラムの中で、全国共通テストで扱われる設問すべてを網羅することは難しい。

確かに、テストや評価の公正さを重視するという観点から、その内容や方法に大幅なずれが含まれるのは好ましいことではない。また、生徒の多様な学習成果を明るみに出すことにより、一層効果的な支援の提供が可能になるという利点もあるだろう。しかし、NAPLAN の目的の一つに示されているように、各領域で、生徒が「どのように」(how) 成果を残しているのかというデータを提供するために共通試験が行われているのだとすれば[31]、教授・学習の結果ではなく、これまで各州・各学校の自治に任せられてきたその「過程」に、国が関与していく可能性も考えられるのではないか。アチーブメント・スケールの活用は、生徒の多様な教育成果を公正に、より具体的に提示するという利点とともに、そのような危険性も孕んでいると指摘できるのである。

4．おわりに――まとめにかえて

これまで、ベンチマークとアチーブメント・スケールという、オーストラリアのリテラシー、ニューメラシー教育に用いられてきた二つの基準・指標について、それらが必要とされた経緯、目的、内容を提示し、それによりそれぞれの基準・指標が可能にする教育評価の形態について考えてきた。ここでは最後に、これらの要点を再度整理するとともに、そこからうかがえるオーストラリア連邦政府が目指す学校教育のあるべき姿について考えてみたい。

ベンチマークは、1996 年の全国調査により明らかにされた子ども達の「低い」リテラシーの程度を改善することを目的に開発された。その後の学校教育で必要とされる最低限の基準を意味するベンチマークの活用は、特に支援を必要とする子どもを明確化し、最終的にすべてのオーストラリア人が適切なレベルのリテラシー、ニューメラシーを身に付けることを保証すると考えられた。そのため、一方では、特にベンチマークに到達した子ども達の多様なリテラシーを十分に把握できないとの問題点も指摘されてきた。

しかしながら、ベンチマークのこのような性格は、同時に、各州・各学校が、州のカリキュラムに基づき、地域の実情に即した取り組みを実践するのりしろを確保してきた。クイーンズランド州では、州のカリキュラムに従いベンチマーク・テストが開発され、また同州の多様な人口構成を考慮して、その実施方法も工夫されていた。ディクテーション・テスト、教員による課題の提示、生徒同士でのディスカッションの導入等は、筆記試験に不慣れな生徒の理解を助けるのみならず、地理的・言語文化的背景からその課題・設問自体に馴染みの薄い生徒に対して、その理解を補う役割を担っていたと考えられる。クイーンズランド州では、このように、あくまでも教員がテストを主導する体制が準備されてきたが、ここには、評価と指導の一体化を強調する州教育省の姿勢をうかがうことができる。

それに対し、アチーブメント・スケールは、ベンチマークの機能を維持しつつ、その限界を克服することを目的に開発・導入された。すなわち、アチーブメント・スケールの活用により、教員・学校・保護者等は、生徒の多様なリテラシーとその成長を把握することができるようになった。しかし、公正な評価を実現するための全国共通テストの実施は、アチーブメント・スケールによる評価の妥当性・信頼性を高め、集団内における個人の位置づけの明確化と他者との比較を可能にしたものの、その実施に至る前段階として、教育内容（カリキュラム）や制度の統一化もたらしてきた。また、教員を監督者と位置付けるため、指導と評価とを、物理的に切り離す必要があった。

確かに、オーストラリアのような多文化社会において、特定の知識・技能を測定する際には、そこで用いられる基準はもちろんのこと、評価される内容や実施形態・方法を一定程度「揃える」必要はあるだろう。しかし、そのような基準・内容・方法が、地域の実情を、意図的にせよ非意図的にせよ、無視した形で揃えられるとき、それは果たして「公正な」評価だと言うことができるのであろうか。アチーブメント・スケールの導入は、教育内容・制度の統一化とともに、子ども達のリテラシーの修得過程を、時系列的に、具体的に「監視」する構造を築き上げようとしている。そして、教員や学校、保護者は、「責任」の共有という名の下に、その「監視」を積極的に行うよう、奨励されている。教育成果の管理は国が行うとの流れの下、その実施「過程」・教育「過程」でいかに子ども達の多様性と向き合っていけるかは、今後の課題と言えるであろう。

【註】

[1] Ministerial Council on Education, Employment, Training and Youth Affairs (MCEETYA), *2008 National Assessment Program, Literacy and Numeracy, Achievement in Reading, Writing, Language Conventions and Numeracy*, 2008, p.2.

[2] 拙稿「教育における「多様性」の保証をめぐってーオーストラリアにおけるリテラシー・ベンチマークの策定過程からー」『Sauvage』第３号，2007 年，pp.60-71. を参照のこと。

[3] 拙稿「オーストラリアにおける全国学力調査の導入とその背景」日本比較教育学会第 43 回大会（於筑波大学）当日配布資料，2007 年６月.

[4] 例えば、Jennifer Hammond, Literacies in School Education in Australia: Disjunctions between Policy and Research, *Language and Education, Vol.15, No.2&3*, 2001. Penny McKay, Standards-based reform through the literacy benchmarks: Comparison between Australian and the United States, *Prospect Vo.14*, 1999 など。

[5] 同上「オーストラリアにおける全国学力調査の導入とその背景」日本比較教育学会第 43 回大会（於筑波大学）当日配布資料，2007 年６月.

[6] The Prime Minister The Honourable P.J. Keating M.P., House of Representatives, *Working Nation: Policies and Programs*, Australian Government Publishing Services, 1994.この白書は、2001 年のオーストラリアにおける政府のビジョンを示したものである。当時の政府にとって一番の懸案事項は、失業率の低下であった。特に、当時の失業者の半数が 30 歳以下の人々であったことから、若年者層の就労・雇用に焦点が当てられた

[7] *Ibid.*, p.92.

[8] これ以前にも 1975 年と 1980 年に二つの国家サンプル調査が実施されているが、各州で評価方法等に顕著な相違が見られたため、「国家」データとして用いるには非常に無理があったと報告されている。（Geoff N. Masters, Margaret Foster, *Mapping Literacy Achievement: Result of the 1996 National School English Literacy Survey*, Department of Employment, Education, Training and Youth Affairs (DEETYA), 1997, pp.1-2.）

[9] 英語のカリキュラム・プロファイルは、「読む・眺める（reading, viewing）」、「話す・聞く（speaking, listening）」、「書く（writing）」という三つの領域（strand）により構成される。これは、1989 年に採択された学校教育に関する国家指針（「ホバート宣言」）に基づき、ステイトメント（statement）とともに出版された。しかし、その使用は各州に一任されていた。
[10] *Ibid.*, p. 52.
[11] *Ibid*, p.iv.
[12] Department of Employment Education, Training and Youth Affairs, (DEETYA), *Literacy Standards in Australia*, Commonwealth Australia, 1997, pp.15-19.
[13] このあたりの事情については、拙稿，前掲論文『Sauvage』第 3 号，2007 年．を参照のこと。
[14] Curriculum Corporation, *Literacy Benchmarks Years 3, 5 & 7, Writing, Spelling and Reading with Professional Elaboration. Curriculum Corporation*, 2000.
[15] また、ベンチマークのレベル設定に際しては、関係者・研究者をはじめリテラシー及びニューメラシー教育の専門家の幅広い協議の下、①最近の教育成果、②各州のカリキュラム・フレームワーク、③基準に関する専門的評価、④海外における同様のプログラム等が考慮されたと報告されている。（http://www.dest.gov.au/sectors/school_education/policy_initiatives_reviews/key_issues/literacy_numeracy/national_literacy_and_numeracy_benchmarks.htm，2009 年 1 月 25 日アクセス確認）
[16] Curriculum Corporation, *op.cit.*, 2000.
[17] *Ibid.*
[18] クイーンズランド州では 1994 年報告書で示された勧告をもとに、1996 年に 6 年生を対象とした悉皆調査が実施された。その後、1997 年以降、ベンチマークを採用した調査が、最初は抽出により、その後悉皆により、３・５・７年生を対象に実施されてきた。
[19] Queensland Studies Authority (QSA), *2006 Queensland Years 3,5 and 7 Literacy and Numeracy Tests, 2006 Test Preparation Handbook*, QSA, 2006, p.11.
[20] MCEETYA, *National Report on Schooling in Australia Preliminary Paper, National Benchmark Results Reading, Writing and Numeracy Year 3,5 and 7*, MCEETYA, pp.41-44.
[21] 具体的には、以下に示す条件が掲げられている。英語が母語ではない生徒で ESL 教員により、NLLIA の ESL バンドスケールでリーディングがレベル４、ライティングがレベル４以下と評価された者。また、アボリジニ及びトレス海峡島嶼民対するバンドスケールでも同様である。さらに、第一言語が Auslan である者。（*Ibid.,* p.42.）
[22] QSA, *op.cit.*, p.16.
[23] 筆者が 2007 年 11 月 15 日（木）に行った QSA へのインタビュー調査より。
[24] なお、テストへの参加は、公立私立にかかわらず、すべて無料である。
[25] MCEETYA, *Measurement Framework for National Key Performance Measures*, 2006.
[26] KPMs では、このような「学力」に関する基準・指標とともに、生徒の出席率や 12 年生の修了率、それらを促進する一助となる職業教育・訓練（vocational education and training : VET）の基準・指標も明確化されている。
[27] 伊井義人「オーストラリア先住民の教育成果に関する一考察－二つの方向性を視点として－」『オセアニア教育研究』第 9 号，2002 年，pp.10-23．を参照のこと。
[28] 2004 年 4 月に行われた MCEETYA の会合で、英語、数学、科学、シティズンシップの各領域で、「国家として一貫性のあるカリキュラム」を運用することが決定された。これは、ナショナル・カリキュラムではなく、あくまでも「共通に必要とされる領域を示したもの」であり、「学習の指針」（Statements of Learning）と「専門的努力」（Professional Elaborations）から構成される。
[29] *Schools Assistance (Learning Together- Achievement Through Choice and Opportunity) Regulations 2005*. ちなみに文書内では、‘must’と示されている。
[30] 筆者が 2007 年 11 月 15 日（木）に行った QSA へのインタビュー調査より。
[31] 2008 National Assessment Program Literacy and Numeracy, Student Reporting Information for Parents (pamphlet)